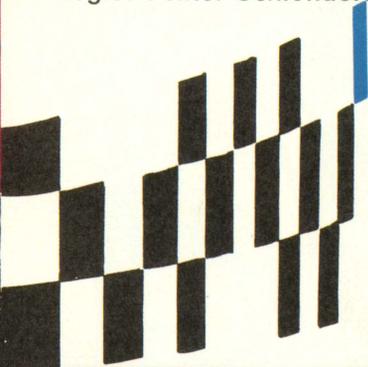


Ein Film von Volker Schlöndorff

Nach dem Roman von Robert Musil

Matthieu Carrière · Marian
Seidowsky · Bernd Tischer
Fred Dietz · Jean Launay · Lotte
Ledl und BARBARA STEEL

Regie: Volker Schlöndorff



Eine Gemeinschaftsproduktion der Franz Seitz-Film, München,
und der Nouvelles Editions de Films, Paris, im Verleih der

テロレスの青春

少年たちは限りなく美しく、そして残酷になる。

監督: フォルカー・シュレーンドルフ

主演: マチュー・カリエール

1966年カンヌ映画祭 国際批評家賞受賞



遠くから見ると随分大きく、秘密めいて見えるものは、近くに来てみるといつだって単純明快で、歪んだところなどなく、自然で日常的な均衡を備えているのだ。

(ローベルト・ムージルの『若いテルスの恋』より)

【解説】

1966年製作のこの作品は、『ブリキの太鼓』で知られるフォルカー・シュレーンドルフ監督の長編デビュー作にあたり、同年カンヌ映画祭で国際批評家賞を受賞、彼の名を一躍有名にすると共に、ドイツ映画を新たに目覚めさせるきっかけとなり、ニュー・ジャーマン・シネマの先駆的作品となった。原作はローベルト・ムージル。ヴィスコンティ監督も映画化を計画していたという本書はヒトラー政権下には禁書処分となり、作者ムージルはスイスに亡命した。思春期の少年たちの残虐行為とそれを傍観するテルスの中に、かつてヒトラーに「身を任せた」オーストリアの「ナチ迎合」を重ねてみる事も可能だが、少年期の持つサディスティックな欲望が容赦なく暴かれる様は圧倒的である。主演はマチュー・カリエール。当時16歳だった彼は、思春期の揺れ動く感受性を鋼のような硬質な美貌で見事に演じている。青年になってからも、フランス映画を中心に『エゴン・シーレ』『サン・スーシの女』などに出演。最近監督にも挑戦している。また、テルスがバイネベルクと共に訪れる娼婦を、イギリス出身の女優でイタリアのホラー映画に多く出演しているバーバラ・スティールが演じている。



【物語】

舞台は、郊外にある男子寄宿学校。上級生のテルス（マチュー・カリエール）は、クラスメイトであるバイネベルク（ベルント・ティッシャー）とライティング（フレート・ディーツ）が、金を盗んだバジーニ（マリアン・ザイドウスキ）という生徒をサディスティックにいじめるのを、困惑しつつも何もせずに傍観していた。彼は、この事件を学校当局に告発しなければいけないと感じつつも、秘密を共有しているために沈黙を守らざるを得ない。しかしその陰湿ないじめが次第にエスカレートしたとき、テルスは一つの結論に達するのだった……。

テルスの青春

フォルカー・シュレーンドルフ監督長篇処女作品

作家は処女作に向かつて成熟する。

製作……… フランツ・ザイツ
 ルイ・マル
 監督・脚本… フォルカー・シュレーンドルフ
 原作……… ローベルト・ムージル
 撮影……… フランツ・ラート
 音楽……… ハンス・ヴェルナー・ヘンツェ
 編集……… クラウス・フォン・ボーロ
 美術……… マーレン・バシヤ
 出演：マチュー・カリエール …… テルス
 マリアン・ザイドウスキ …… バジーニ
 ベルント・ティッシャー …… バイネベルク
 フレート・ディーツ …… ライティング
 バーバラ・スティール …… ボジエナ

配給：アップリンク

1966年/ドイツ・フランス/1時間27分/モノクロ/1:1.66
 ©FRANZ SEITZ-FILM MÜNCHEN

マチュー・カリエールの圧倒的な美しさ。 増山 のりえ

テルス少年と出会ったのは、高校生の頃だった。『若いテルスの恋』という、どこか心魅かれるタイトルの本を手にして、勇んで読み始めたが、細やかな心理描写が延々と続く文章に、かなりてこずった記憶がある。なかでも強烈な印象を受けたのはバジーニ少年が初めてテルスの前で裸身をさらすくだりで、それは「男性的な徴候がない、少女のようにけがれのなく、すらりとやせていた…」と描写されていた。その清らかな美しさに、テルスは「ただ圧倒される感じであり、おどろきだった。」と語る。ここでテルスの心の壁が崩れる。女体に対する官能とは別の「生命への門をぱっと一時に開いた結果」となり、「これは新しい感情だった」と説明する。このあたりのきめ細かな心理描写は美しく、感動的ですからある。

作者ムージルは、23歳（1903年）からこの小説を書き始めているが、こうした少年期の心理状態を、男の人はこうまで鮮烈に記憶しているのか、と高校生の私は驚嘆したものだ。日本にも、森鷗外の『キタ・セクスアリス』をはじめとして、堀辰雄の『燃ゆる頬』など、男子校で同性愛に目覚めてから、異性への愛へとたどる、自身の思春期を描いたこの種の作品がいくつかあるが、『若いテルスの恋』もこの範疇の代表的な作品のひとつと私は考えている。

映画の中のテルスは、私が想像していたよりもはるかに美少年で、16歳のマチュー・カリエールの美しさに、ほとんど圧倒されてしまった。小説では、バジーニ少年のほうがスラリと細みで美しい少年という印象だった。バジーニ役を、マチュー・カリエールに負けぬほどの美少年が演じていれば、2人が語り合う場面が、もう少し官能的になつたらうに、などと我がままなことを考えてしまう。小説のなかでは、テルスとバジーニがベッドをともにするシーンが、ていねいに描かれているが、1966年製作の映画では、ここまで映像化するのが精一杯だったのかな、と思いつつも少々惜しい気がした。ところで、こうしたキタ・セクスアリスの作品を、世の男性諸君はどう受け止めるのだろうか。甘酸っぱい共感か、はたまたファンタジィ（別世界）として眺めるのみか機会があれば、ぜひ伺いたいものである。

UPLINK Video Collection



NO SKIN OFF MY ASS

ブルース・ラ・ブルース監督

ゲイのヘア・ドレッサーが、童顔のスキン・ヘッドのバンク少年と恋におちたら…。

絶賛発売中 定価5800円



LOOKING FOR LANGSTON

アイザック・ジュリアン監督

スタイリッシュな映像で綴る、詩人ラングストン・ヒューズ、ジェームズ・ボールドウィンへのオマージュ

絶賛発売中 5800円

5月29日(土)よりレイトロードショー

当日料金：一般¥1800 学生¥1500 前売り券：¥1400 (劇場窓口、チケットぴあ、チケットセゾンのみ)

●シネセゾン渋谷劇場窓口で前売り券お買い上げの方に特製ポストカードプレゼント。

9:20pm-10:55pm

シネセゾン 渋谷

道玄坂 ザ・プライム6F 03-3770-1721